

建設業から循環型農業への展開

金亀建設株式会社

総務課長 高須賀 哲

1 はじめに

当社は昭和32年以来、舗装工事を専門分野として、主に公共工事を中心に事業を営んできた。

しかし、昨今の公共工事の削減や公共事業悪者論により、経営の低迷は必至で、社のスリム化を図り、やがて、社員の切捨てへと事を進めるべきかどうかの岐路に立たされた。10年前には、こんなになるとは夢にも思わなかった。

ところが、舗装工事にとって、技術と技能は要であり、永年コツコツと技を磨いて、優秀な技能を身につけた熟練工は、社にとって“宝”であり、いかに“宝”を守りながら、この不況を乗り切る手立てはないものかと悩み、農業に目を向けた。

- ・地域農業の担い手の減少。(高齢化、耕作放棄)
- ・食の安全性、安心感が問われている。
- ・地域密着の産業であること。



建設業による循環型農業の概念図

2 「あぐり」の立ち上げ

農業展開への突破口となるいくつかのポイントを下記に挙げてみた。

- ・建設と農業は表裏の関係。(工事が比較的暇になる時期が農繁期)
- ・建設業と農業、同じように自然の中で仕事をしている。
- ・体を使い、汗をかきながら仕事をしている。
- ・社員にも多くの兼業農家がいる。
- ・代表者が農業資格を持っている。
- ・かつては農家の人達の多くが農閑期には建設現場で働いていた。その逆も可能では？

ポイントを整理した結果、工事が比較的暇な4月から10月にかけては、農業が繁忙期であるから、建設現場の余剰人員を、農作業に振り分ければ、雇用の安定につながる。また、食の安全性、安心感が問われている中、「脱農薬・脱化学肥料による循環型農業」の確立、地域農作業の新たな担い手として貢献できるのではないかと。加工業者などから大量に捨てられる食品残渣を自社で堆肥化し、それを畑に還元。土作りを基本にした無農薬無化学肥料栽培を行い、安全でおいしい米や野菜を生産し、地域の消費者に提供し、地域の人たちに喜ばれる農業を展開したい。そんな願いも込めて、平成12年11月、農業生産法人・有限会社「あぐり」を設立した。

それは地域の休耕地や担い手不足の農家から田んぼを預かって、建設技能工による、脱農薬、脱化学肥料という一見無謀な地域循環型営農のスタートでもあった。

3 みんなで力を合わせて

当社の代表取締役が持っていた60aの田んぼをもとに「あぐり」は歩みをはじめた。社内から公募したら、数人から、是非一緒にやりたいと申し出があった。資金もそんなにあるわけもなく、農業機械はほとんど中古。修理も当然、自社の修理工場。自家製堆肥のボカシを造る装置もミキサー車を改造した廃車利用の装置である。ハウスも、「解体して持って行ってくれるならタダでいい。」と、農家の方に分けて戴いた物を、自分たちで建てた。解体・建設は得意分野なのだ。微生物も自社にて培養し、その装置も自分たちで作ら上げた。

耕作地については、農用地利用増進法にもとづき、地元の農家と賃貸契約を結び借り受けることにし、地元の新聞に「田んぼ預かります」という折り込みチラシを入れてみた。賃貸期間は3年以上10年以内（農家の都合により臨機応変に対応）、借地料は10a当たり年間6,000円から12,000円。ハウス等の施設は建てず、有機無農薬栽培を行うという条件で。

翌年から毎年数ヘクタールずつ耕作地が増え、今年の田植えの時には40haを超える予定である。ほとんどは松前町と伊予市だが、最近少しずつ松山市にも増えてきた。

4 堆肥づくり、そして有機無農薬栽培の実践

「あぐり」の堆肥づくりは自社培養の微生物を使用していることである。これを4種類の食品残渣（伊予市の鯉節業者から仕入れた花カツオのくず・松山市内の豆腐店のおから・米ぬか・もみ殻）に入れて廃車利用の生コン車を改造したミキサー車で攪拌し、分解・熟成処理を行い、「あぐり」独自のボカシ肥料を作っている。

しかし、混合の比率や熟成期間はまだまだ試験的な

段階で、効果があまり上がらない場合もあるが、「あぐり」の農地の栄養分はこのボカシのみであり、市販の肥料は使用していない。



ぼかしミキサー

「あぐり」の農業は土づくりを基本にした有機無農薬栽培、これがなかなか甘くない。田んぼは常に草との戦いの日々である。しかし、草に負けたのでは、田を貸していただいた農家に申し訳がたたない。ただただ頑張るのみである。

田んぼの除草を何とか軽減出来ないだろうかという考えた末に、紙マルチを使つての田植えや、アイ



アイガモ農法



木酢液散布

ガモ農法に取り組むことで、除草作業の軽減を図ることが出来た。ただ、夏場のピーク時には、1日に約20人が除草のため田んぼに入った。なかなか大変である。

日々奮闘の結果、「あぐり」の野菜は徐々に付加価値を高めている。愛媛県の「愛媛県特別栽培農産物等認証制度」によって、「あぐり」のお米・トマト・ジャガイモ・レタスが、特別栽培農産物等に認証され、「エコえひめ」認証マーク入りでの販売が始まった。一生懸命頑張った作業員に対してこの上ない荣誉である。



愛媛県特別栽培農産物等認証制度

5 農業はなかなか甘くない

農業を始めて、すぐ気が付いた、「これは、甘くない」と。思っていたのと全然違う。道路の舗装もしんどいが、無農薬で行う農作業の方が数倍苦勞する。そのうえ、建設工事といえども、サラリーマン化しており、8時から17時が仕事時間という感覚に慣らされていたが、田んぼは、全くそういう訳には行かなかった。

それでも、道路工事をして、地域の方からの苦情や交通事故等に対するストレスに比べると、田んぼの中で作物を育てるほうが気持ちいいと言う社員が増えてきて、自主的に朝の4時頃から田んぼに出て行く者が増えた。でも、やっぱり決定的に違うのは人工物を造るのと、生き物を育てるのは大違い。いろいろ苦勞はあるけれど、土木で培ってきた工程管理、原価管理は威力を発揮しており、コスト計算はかなりシビアだ。毎年毎年コストを改善させる工夫をみんなで話し合っている。

しかし、少ないときは5人で、多いときは20人近くが「あぐり」の田んぼで働くため、かなりの人件費がかかっているのが実状である。業として、一日でも早く無農薬でやれる農法を確立しなければならない。そのために、例えば米作りでは、「米作りマニュアル」を苦心の末作り上げ、みんなが同じ作業が出来るようにしている。

ところが、地域ごとに農習慣が違う為、それぞれの担当者は、担当地域に溶け込むようにして、農習慣を教えてもらっている。しかし、なかなか思うようにはいかない。やっぱり農家の方はすごい！このマニュアルが体全体にインプットされており、そのデータに感性を織り交ぜながら、毎年毎年、巧みな技で作物を作るのだから。そういう地域別の農習慣もマニュアルに織り込んで、一日も早く地域の仲間入り出来るよう、担当者一人一人が頑張っている。私など、農家の後継ぎでありながら、インプットどころか、マニュアルさえなかなか理解できないレベルなのだから、全くもって恥ずかしい。だから担当者の苦勞と云ったら、大変なものだ。農業は本当に奥が深い。

昔から、農業がきちんとやれる人は、どんな仕事もきちんと出来て、信用のある人と聞く。だから当社の従業員のレベルとしても、田んぼがきちんとやれる者が増えることは、会社全体のレベルアップと考えている。

6 すべてがチャレンジ

今は、なんにでも挑戦をしようと思っている。たくさんの方にチャレンジし、そのなかで、なにかをつかもうと奮戦している。少々おこがましいかもしれないが、失敗を乗り越えて“あぐり”らしい農業スタイルを作りたいと思うから……

以下に、そのいくつかを紹介する。

一つ目は、無農薬栽培技術をマニュアル化する研究である。われわれには、農家のような伝統的な技能もないし、職人技のようなものも持たない。だから、大学と一つ一つ検証しながら、すすめている。無農薬栽

培技術と味覚度は、愛媛大学と行っているが、これだという決定的なところまではきていない。

二つ目として、東京のある大学と土壌診断をやっている。GPSをつんだ測定器で、水分やPH、EC、全炭素などを、田んぼを升目状に分けて、測定している。いわゆる精密農業へのチャレンジだ。我々が預かる田んぼは、不特定多数だから、その田んぼのコンディションはよく分からないし、玄人のような目利きもないので、このようなやり方を、これからどんどんやっっていこうと思っている。余談になるが、条件の悪い田んぼから預かって欲しいといわれるケースが結構ある。

三つ目として、エキスの抽出を、岡山の大学と一緒にやっている。とにかく、今は、得られたデータから学んで、少しでもお米作り名人の技に近づけるようにと思っている。社内にも元農協の営農指導員がおり、地域の農家の方に、指導もお願いしているが、圃場の数が300を越えると、名人の技だけでは、追いつかなくなる。今後も、精密農業を積極的に推進しようと考えている。

お米を作ることも大変難しいことであるが、売ることは別の意味で、これもまた大変難しく、販路を開拓することも、やはりチャレンジだ。今は、道後のホテルとの年間契約や高級食材を扱うスーパー、こだわりのレストランなどへ主に出荷している。当初は、大手の量販店バイヤーさんへの営業も数多く試みたが、やはり値段的に難しい面もあるし、買う側があまりにも強すぎるので、あまり進展していない。



あぐり米

それでも、最近では、大手食品メーカーや大都市からの問い合わせが増えてきているので、今後の売り方については、未知数ではあるものの、期待を持っている。

また、社員にはお米を特別価格で販売している。彼らが美味しいと言ってきて、はじめて、一般の方にお売りすることが出来るとの社長の信念からだ。社内にモニターがいるのは便利だ。本当は社員こそが、第一のお客様かもしれない。

今年も130tくらいのお米が収穫できる予定だが、20%くらいは社員に販売する予定だ。そんな具合で、採算面は今一歩だが、もう少し圃場が増えて、スケールメリットが増せば、黒字化できると考えている。

7 参入して感じたこと

参入から5年半、いろいろ感じることはあるが、まず一番に、農業は収益性という点では少し低いような感じがする。でも、これはスケールメリットでカバー出来ると思っている。

二番目に、法的な制約が結構あるということ。このような問題も、今や食料自給率の面からも農業に対する見直しが徐々に始まってきており、今後何かが変わると期待をしている。

三番目に、農家ではなく、農業生産法人として、その地域や既存の農家の方々の“しきたり”へ溶け込む難しさがある。

他には、前述したが、我々にとって「作る」ことよりも「売る」ことのほうが難しいということ。

また、建設会社の社員として入社した者が、「あぐり」に配属されたとき、農業へ従事する気持ちへの切り替えが、やや困難な場合がある。建設業の会社に入ったのに、なぜ自分が農業をしなければならないのかと考える社員もいるのが実情である。自然環境が建設業よりも影響されやすいなかで、なぜ、無農薬という困難な方法を選ぶのか。でも、そんな彼らも、最近少しずつ変わってきた。

8 地域とともに歩んで行きたい

今後、事業の存続の為には、持続可能なだけの収益を確保することが絶対条件であり、加工、流通をも踏まえた取り組みをし、マーケティング研究・改革を進めていかねばならない。そのために、地域や行政との更なる連携を模索してみたいと思っている。その一方では、農業の可能性として、バイオマスへの挑戦や、食品以外での田んぼの利用も検討する必要がある。中高生のインターンシップの受け入れも、我々にとって良い起爆剤となるのではないだろうか。

立ち上げから5年半、耕作地がこんなに早く30ヘクタールを超えるとは思ってもみなかった。雇用の安定化を目的として、始めた訳だが、これだけ面積が増えてくると、一つのビジネスとして農業を捉えていかないと、中途半端なものになってしまう。現状はやはり毎日毎日が試行錯誤の繰り返しで四苦八苦。体裁のいいことをいくら並べても、話題を提供しているだけにしか過ぎない。

「金亀建設株式会社が農業に進出」、そんな話題が一人歩きしてしまい、中身が伴わないのも事実であり、成功事例では決してないのである。我々はまだまだアマチュアなのだから。



稲刈り

9 辛い事ばかりではない

試行錯誤し、四苦八苦。でも、その反面、この五年半で応援して下さる方々が、ずいぶん増えた。立ち上げ当初は、ほとんどの方から、「そんなことをやっても無理だろう。」と言われたが、今では、地域の区



農業生産法人「あぐり」の社員

長さんをはじめ、農家の方々に助けてもらっている事が多くなり、結構声もかかる様になった。行政の方々にも、同じように応援して頂ける様になった。本当に有難い事である。社内に於いても、やる気のある連中がだんだん増えてきており、「あぐり」でやりたいという者も増えて来ている。

上述の補足になるが、農業に関わったことで、喜びを実感するようになった。最初はコミュニケーションがとりづらかった地域の農家の方が、今では、協力的に接して下さる様になり、少しといえども、地域の農家の仲間入りが出来たと実感している。また、社員は脱サラリーマン感覚で農業に取り組むことに喜びを感じることができ、それが増えてきつつあることも嬉しいことである。なにより一番の喜びとは、おいしかったと言われることであり、それが支えとなって続けることが出来るのである。

当然これらの事は、炎天下の中で、苦勞をいとわず、真面目に農作業に従事している職員の努力のお陰であり、それを認めてきつつある地域の方々のご理解の賜物である。とにかく、お叱りを受けながらも持続可能になるように頑張らなければならない。そんな勇気が湧いてくる。

10 アグリビジネスの展開

立ち上げから5年半が経過した今、我々職員の気持ちの中で他人事のようにとらえていた「農業」を自分自身の事として考えるようになってきた。「あぐり」の展開についても少しずつ分かってきた様な気がする。

以下、社長の言葉を借りて記述することにした。

「長い歴史の中でつくり上げられてきた「農業」も、最近では、「アグリビジネス」と称されるものになりつつあるように思う。それは、農業をいかに経済原則の中に置いて、商売を発展させるかのような動きだ。

例えば、生産者の顔の見える農業から消費者の顔を見る農業へと変貌しなさいとか、作れば売れる原材料供給の農業から、消費者の求める高品質農産物、高付加価値の加工品作りを目指せとか、食品製造業とタイアップ出来る加工業展開とか、安全・安心の差別化、ブランド化、地産地消、地域内循環の食品リサイクル化、さらに、情報技術を農業へとか、さまざまな観点から巧みな商売化傾向が強まっている。それはそれで良いと思うし、我々もそういう風に展開しないと、成り立たないと実感している。でも、地域の中でそればかりを考えていたのでは駄目ではないだろうか。農業を、ただ単に経済原則やビジネスとだけ捉えることは、出来ないように感じている。

「農業」から「アグリビジネス」へ展開はするけれども、やはり、「アグリビジネス」から、『農』の本質というか、原則を見出さないと、地域に受け入れられない様な気がする。

例えば、地域色豊かな郷土景観文化としての『農』。郷土料理、文化、信仰の伝承としての『農』。そして、自然と生物生息環境の空間としての『農』。それから、本来の百姓という漢字の意味がもっているお百姓さんの能力を総称する『農』。いささか哲学的かもしれないが、そのような歴史的なことや各地方の郷土独自の文化の源になっているからこそ、それを十分に踏まえただうえで、「アグリビジネス」を展開出来れば理想である。」

1 1 おわりに

サラリーマン感覚が残っていた我々も新しい挑戦で色々な事を経験した。苦しい事もたくさんあったが、地域の人達の中で何か手ごたえを感じている。今後一歩一歩着実に、そして社是の“くじけず おごらず”

をモットーに「第二種兼業農業法人」を目指して職員一丸となって歩んでいきたいと思っている。

Profile 高須賀 哲 (たかすか さとし)

1955年 愛媛県東温市生まれ
1990年 金亀建設株式会社入社
2000年6月総務部総務課長
